
トンネルを抜けたら異世界だった 外伝

夏休みの宿題

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トンネルを抜けたら異世界だった 外伝

【Nコード】

N4024Q

【作者名】

夏休みの宿題

【あらすじ】

トンネルを抜けたら異世界だったの
登場キャラのお話になります。

本当は本編に挟んで投稿するはずだったんですが
以外にこれが難しく、5話に1話を挟めなくなってしまうので。
なので、ゆっくりと作っていかうと思いましたが
この用に外伝とさせて頂きました。

雪江Side(前書き)

本編に記載されていた雪江Sideですが
こっちにお引越しました。

雪江Side

私は本当に一樹のことが好きだった
生まれたときから一緒にいて、

幼稚園も、小学校も、中学校も、高校も、大学も一緒だった
私の両親は小学校の頃から、一樹君が雪江を

お嫁に貰ってくれればいいのと言っていた。

一樹の両親も同じように、雪江ちゃんが一樹のお嫁さんになってくれれば

安心できると言ってくれていた。

一樹は小学校からサッカーをやっていたので

一緒に遊ぶことは少なかったけど

何時も試合は応援にいつていた。

一樹と同じ高校に行きたいから

一生懸命勉強した。

一樹はヒーローだった。

女の子の声援を受けながら

サッカーをしている一樹がちょっと嫌だった

私以外から声援を受けて笑う一樹がずっと嫌だった。

友達は一樹君って絶対Jリーガーになれるよね

今のうちに玉の輿狙っとくなんて言っていた。

高校3年生の時一樹が怪我をした。

もうサッカーは出来ないと言われて。

ずっと泣いていた一樹

私もすごく悲しかったけど、

一樹が怪我をして少し嬉しかった。

もう女の子から声援を受けて
笑うことはないと思ったから。

雪と一緒に大学行くために
勉強頑張ったんだって言われて
すごく嬉しかった

でも一樹は頭がいいからそんなに勉強して無いくせに

高校の卒業式で一樹に告白されたときは
夢かと思い一晩中寝ることが出来なかった。
これからずっと一緒にいれると思った

ただ私はずっと不安だった。

一樹はカッコイイし、勉強も出来る。

運動はもう出来なくなっただけど

天は二物を与えずなんて嘘だ

一樹は2つも3つも4つも持ってる。

だから一樹会えない時間がずっと嫌だった
一樹が何処で何をしてるのか
わからないのがずっと嫌だった。
私の前にいない一樹がずっと嫌だった。

就職活動が忙しいのは分かった。
私だって忙しかったし、中々決まらなかった。
なかなか決まらない就職

でも私はお父さんが助けてくれた。
私はお父さんの知り合いの会社に
腰掛として就職が決まった。

お父さんが娘は2・3年すれば結婚するだろうし

それまででいいからと言って頼んでくれた。

私だけに時間が出来た。

一樹は出来る限り時間を作ってくれたと思う。

忙しい合間に会いに来てくれたし、

電話もしてくれた。

一樹は将来雪と結婚して子供が出来ても

雪が働かなくていいように

なるべくいい会社に入りたいんだ。

サッカー選手になればそんな事もなかったんだろうけどさ
ってちよつと悲しそうに言っていた。

私はそんなことは別にいいからと

一緒にいる時間をもっととってほしいと思っていた。

だからだろうか義春に魅かれてしまった。

義春はいつでも寂しいときに電話をしてくれた。

義春はいつでも寂しいときに会いに来てくれた。

義春はいつでも寂しいときに抱きしめてくれた。

だからだろうかいつの間にか

私の心の中から一樹がすごく小さくなってしまった。

だから私は義春を選んだ

義春は私のずっとそばにいてくれるから

でもなんでだろう

最近義春から電話が少ない。

最近義春と会う日が少ない。

最近義春は抱きしめてくれない。

義春は一樹とは違うよね

いつでもそばにいてくれるんだよね？

だって私は義春を選んだんだから

義春は私を選んでくれたんだから

そういえば最後に義春と会ったのはいつだったけ？

Side (前書き)

ずっと久しぶりにこっちを更新しました。

Side

今日、私は奴隷商人に捕まった。
迂闊だった。

狩りで獲物を仕留めたまではよかったが
血の臭いの所為で、人の気配に、気が付くことができなかった。
素早く服従の契約を交わされ、逃げることもできなかった。
奴隷商人は卑しい笑みを浮かべ

山猫族でもこのツラならいい値段で売れそうだと言っていた。
確かに私は、山猫族だ。

竜人族や鳥人族のように、魔獣の使役を目的で売買はされないだろう。

つまりは、人の慰み者になる。

その日の夜は、風呂に入れられ念入りに体を洗われた。
少しでも綺麗にして

値段をあげようと考えたのだろう。
だったら、もう少しマシなところで寝かせてくれてもいいんじゃないかな
いかと思った。

もう、逃げるな、逆らうなと命令されているのだから
どうにも出来ないのだから。

今日は広場で私は売りに出された。

私には300イエンの値段が付いていた。

私を物珍しそうな顔で見る街の人達

中には、卑しそうな目で見る人もいた。

そして、その中にはお父さんがいた。

たまたま街へでていたのか。

それとも、知らせを受けて駆けつけたのか。

お父さんには見られたくはなかった。
でもきつとこれが最後だと思うから
お父さんの顔を、しっかりと目に焼き付けておく。

暫く奴隷商人は誰か買うものはいないかと叫んでいたが
誰も私を買おうとなんてしない。
当たり前だ。

ずっと続く街の工事と

去年の凶作と今年の日照りで

食べるのが、精一杯の街の人が多いはずだ。

私達亜人も、狩りがなければ飢え死にしている。

300イエンの大金を、ポンと出せる人がそうそうにいる訳が無い。

よほど物好きな貴族でもない限り、慰み者として

山猫族を買ったりする訳が無い。

そう私は少しでも安心していった。

一人の男が来るまでは

その男、は少し変わった服装をしていた。

男は、砂糖と胡椒の商人をしていると言って

砂糖と胡椒との交換でいいなら、その亜人を買いたいと言った。

私はこの男に買われ慰み者になるのか

絶望しか浮かばなかった。

すると男は、今日は持ち合わせがないので

明日買い取りにくるといった。

そのまま戻ってくるな、私はそう願っていた

今日は約束の日だ

奴隷商人と一緒に少し早めに広場へ向かった。

男が来ない事を祈っていたが、男は来てしまった。

大量の砂糖と胡椒を持って

その後、奴隷商人と男の騙しあいがあり、

その男は3000イェンもの大金を手に入れていた。

びっくりするような金額だが、

然るべき場所に卸せば、もう500イェンほど値段が上がっただろう。

良く見ると中々優しそうな目をしてる男だったが

油断はできないので、私は男を睨みつける。

でもその男は、本当に優しかった。

そして不思議な男だった。

名前を一樹といった。

私に命令したりせず、食事に誘い。

この街を知らないからといって

奴隷である私に、お金を払って色々聞いてきた。

一樹の話を聞いているうちに

私達も、一樹の村のような場所で生活をしたと思った。

亜人だからといって隠れて住む必要のない場所だ

その為には、一樹の協力は絶対に必要なだ。

あの余りある財力は、村を作るには必要不可欠だからだ。

そして、あの襲撃事件が起こった。

何故、私が怒鳴られなければならないのか

最初は、理解出来なかった。

でも、それが一樹の優しさなんだと気が付いた。

本当に優しい人。

でも、その優しさは、ここでは仇になる。

そして今、私は、顔を真っ赤にして街へ向かって歩いている。

一樹はきつと知らないだろうと思うけど。

女性からする口付けには、こんな意味があるのだ。

【私は、永遠に貴方の物】

みんなの前でするのは、かなり恥ずかしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4024q/>

トンネルを抜けたら異世界だった 外伝

2011年3月6日00時00分発行